

労働と教育の結合思想について

米 田 英 一

(一)

労働と教育の結合という大問題を構想しようとする場合、その立脚点は、労働と教育とが結びつく根拠、結合の必然性と可能性とを明らかにすることであろう。労働と教育のはらむ本質的な結びつきの、内的な、必然的な契機を把握することによってはじめて、そもそも労働と教育とを結合するとは、一体、どういうことなのか、なぜ教育において労働が問題となり、どうしたら結合が成立するのかということも、明らかになってくる。その意味から、この小論では、労働と教育の結合の方法とか内容に具体的に立入ることはせず、結合の意味、理念、思想についての理解を深めるという課題に限定する。

人間形成の科学としての教育科学において労働が問題とされねばならぬという以上は、労働が、人間そのもの、人間の本性と、わかちがたい連関性を有しているということに他ならない。換言すれば、労働と教育の結合の契機は、まさしく、人間の本性そのものの内に見出されねばならないのであり、労働とのかかわりで、人間の本性なるものの認識をどれだけ深めるかが、結合の目的や内容や方法を理解するための基本的な前提であると考えられる。

そこで、動物よりも高次の生物種としての人間の本性を特徴づけるものは一体何なのかということが問題になってくるのであるが、これに関しては『ドイツ・イデオロギー』の中で、明確な解答が与えられている。すなわち「人間は、意識によって、宗教によって、そのほか任のものによって動物から区別されることが出来る。しかし人間自身は、かれらが、かれらの生活手段を生産しはじめるや自分を動物から区別

しはじめる^り。」つまり、人間を他の動物から区別することのできる諸特性を、いくらあれこれと数えあげてみたところで問題は片づかない。理性であれ、思考であれ、言語、宗教、道徳その他何であれ、それら人間に固有であるとされる、もろもろのものが、決して一挙に、『神の御手によって』人間の内にもたらされたものではない以上、人間がいかにして、何によって、己れに固有な諸特性を獲得してきたのか、そのことこそ問題なのである。そして、飲み、食い、住み、着る等の生活欲求を、直接みたすための生活手段の生産、生産的な労働こそ、人間が動物から自己を区別し始めた最初の歴史的行為であったと、マルクスとエンゲルスとは主張しているのである。たしかに人間のみが言語を持ちうるが、それは人間であることの一つの結果であって、その根拠ではありえない。言語の発生ということも、実は、生産のための労働と、労働において人間がかかわりあう関係からしか説明できないのである。労働の発達で、人間たちを相互にいっそう結びつけ、協働の必要性が高まり、それが各個人に意識され始めた時、つまり、生成しつつある人間たちが、もはや互いに何かを話しあわずにはいられなくなった時、必要と欲求とが、そのための器官、発声器官をつくりだしたのであって、この逆ではない。

つまり、人間の本性とは、決して、固定化し完結されたかのような不変の実体ではなく、歴史的にとどまることのない、絶対的な自己生成の過程なのであり、その動因とは、人間自身の生命活動である労働に他ならない。だから人間の本性は、自らの労働による自己生成の主体ということによってこそ特徴づけられる——これが、人間の本性と労働との関係を考察していく

ための基本認識に他ならない。以上の認識から、人間とは自己生成の主体であり、労働とは人間の自己生成の活動であり、人間の歴史とは労働による人間の自己生成史の過程であると、あらかじめ規定し、以下、労働による人間の自己生成史について考察していくことにする。

(二)

まず労働を、人間が己れの欲求にふさわしく自然をつくりかえる過程、「自然を人間化する活動²⁾」として考察する。この場合、労働による人間の自己生成の過程は、人間が直接的に自然の内へと包摂された存在から、ますます意識的に身をふりほどく過程、自然的制約から自己を解放し、いっそう大きな主体的自由を獲得していく過程として考えることができる。

人間は、まず、自分自身が自然的世界の一部分として、自然の内へと包摂された存在としてたち現れる。さしあたりは、生身の肉体をそなえた感性的な存在として、内的にも外的にも自然によって拘束され条件づけられた「一つの受苦的な存在³⁾」でしかない。だが人間は、同時に、生きた「活動的な自然的存在」として「自然的諸力」「生の諸力」をそなえた存在でもある⁴⁾。つまり、さまざまな生命欲求にみちた人間にとって、自然はまた、己れの欲求の対象でもある。しかし、自然的諸対象は直接的には、人間にとって制約性として、己れの欲求充足にすなおには応じてくれぬ対立物として意識されざるをえない。諸対象は、それ自身の内的諸法則にもとづいて執拗に抵抗する。そこで人間は、この頑固な自然物を征服して己れの生命欲求を充足するためには、その自然物に固有な内的法則を己れの意識の内に反映し、その法則にみあわせて己れの活動を規制する必要に迫られる。だから、人間が自然の制約から己れを解放し、逆に、自然を支配する主体的自由を獲得しうる場合は、人間の意識の内に自然の客観的な諸法則が、どれほど正しく反映されるかにかかってくる。

このように労働は「まず第一に人間と自然とのあいだの一過程」であり、自然的諸対象に対し人間は、まず「彼自身一つの自然力として」その生まれつきの「肉体的器官だけ」を労働手段として相対する⁵⁾。この過程において人間は、いまだ自分自身の自然の内に眠っている潜在的な諸力を発動させ、その諸力の営みを規制して、労働能力へと発現・転化していく。つまり、外的自然を己れの欲求に応じてつくりかえようとする過程は、己れ自身の自然、内的自然をもつくりかえる過程である。この意味において、手は労働のための器官であるばかりではなく、労働による所産に他ならないのである。手は労働が複雑になるにつれ、次々と新しい操作に適應することによって、ますます指のしなやかさを高めていく。しかも手の発達は、当然、一つの全体をなす最高度に有機的な生命体のすべての部分、とりわけ脳髓と感覚諸器官に、作用と反作用とをもたらし。また、対象の法則性を認識する能力、全過程を通して肉体の諸器官を規制し統制し、注意を集中する意志能力などが発達することは言うまでもない。さらに、労働の過程は、感性と理性とを洗練して、人間をいっそう情熱的な存在へと形成し、「自然に創造的に働きかけて、これを美の法則にしたがって」形づくるところの「本来的に芸術的な過程⁶⁾」でもある。人間の生命活動、生命欲求の総体としての発現の過程である労働の過程では、当然のこととして、人間の理性、意志、情熱の発展は、相互に媒介しあいながら、不可分の統一を形づくっている。まさしく労働は、肉体的、精神的諸能力総体の発現、発展の過程として、その担い手である人間的人格の「統一性の基礎⁷⁾」に他ならない。逆に言えば、もし労働が、人間の生命の「疎外された発現」とされるなら、人格の「統一性は解体されざるをえない」のである⁸⁾。

労働の過程は、人間が自然を外的にも内的にも、己れの欲求に適合するようにつくりかえる過程であり、まさしく自然を「人間化する」過

程である。自らの「意志の刻印を大地にきざみつけ⁹⁾」世界を己れにふさわしくつくりかえていく過程は、また、人間が自らの所与としての自然的姿態に手を加え、肉体的にも精神的にも、感性的にも理性的にも、ますます己れを人間的に洗練していく過程でもある。まさしく人間は、全自然を対象とした、巧みな「彫刻家¹⁰⁾」なのである。

だが、発達した手が、人間にもたらした、自然的な制約からの自己解放的な意味は実は、もっとはるかに大きかったと言わなければならない。発達した手をもって自然物へと働きかける人間の労働が、いっそう多面的となり、労働対象をさまざまに能動的に運動させることができるようになると、人間はついに、ある頑固な自然物を征服するために、己れとその自然物との間に、よりすなおで扱いやすい他の自然物をさしはさみ、己れの労働を媒介させることを思いつくようになった。つまり、手と労働対象との「直接性」は「止揚¹¹⁾」され、ここに「間接性¹²⁾」が産出されたのである。手の労働の伝導体として発見されたこの新たな自然物こそ、真に人間的労働を特徴づけるものとしての道具に他ならない。はじめは、自然物（石とか木の枝とか）がそのまま道具・労働手段へと転化される。こうして自然の一部が、人間の肉体的器官につけ加えられ、その自然的姿態を延長する器官、その「非有機的な身体¹³⁾」となってきた。ついで人間は、自然物に手を加え、己れの肉体的器官に似せて、いっそう精巧に労働手段を形づくることを習得していき、ついには、労働手段そのものを生産することを労働目的とするにいたる。肉体的欲求を直接みたすために労働を始めた人間が、労働の過程で、これを間接的にみたすことを学び始めたのである。

つまり、道具という間接性の産出は、人間を外的自然との直接的結合からひきはなしたのであるが、この外的な変化は必然的に、それに応ずる変化を人間主体の内部にひきおこさずにはいない。すなわち、外的自然からの間接性の獲

得は、内的自然からの間接性の獲得でもあり、それは直接的な自然的、肉体的欲求からの自由となって現れてきたのである。道具それ自体は、決して食べられるものではなく、それを使って食物を獲得する手段であり、それを媒介として肉体的欲求をみたすための間接的な手段である。この産出された間接性こそ、自然との間に直接的な関係しか持つことのできない動物の生活から、人間の生活を明確に区別し、特徴づけるものなのである。動物は、ただ直接的な肉体的欲求の支配のもとでのみ生命活動をおこなうにすぎないが、人間は肉体的欲求に迫られなくても生産するし、むしろ「肉体的欲求から自由なばあいにはじめて真実に生産する¹⁴⁾」と言うことができる。人間においてのみ本来、何かしらの肉体的欲求を充足するための手段として生産されるものが、しだいに肉体的な欲求充足そのものから、相対的な自律性を獲得し、ついには人間の生産欲求の直接の対象として、自己目的化されることが可能になるのである。人間は、まず食うために労働を始めたのであるが、今では労働するために食うようになり、生活のための手段として現れた労働が、今では人間の生活の第一の欲求となってきたと言える。このようにして人間が、その物質的生活の中で、物質的生活以上のものを生み出していく契機は、間接性の産出の中からつくりだされてきたのである。直接的な肉体的欲求からの自由の獲得こそ、人間の労働が目的意識的とされる真の意味であり、また、その後に生成するあらゆる人間的な欲求、精神的な諸欲求の発現、発展の基礎をなしている。

自然のままの道具から、加工された道具とその集積へ、さらに原動力として自動装置をもつ機械体系へと、労働手段が発展し、自然と人間との間接性がますます大きく豊かに多面的になっていくにつれ、この外的な豊かさは、同時に、内的な豊かさへと転化し、人間の内的世界もまた、いっそう豊かで多面的となるのであり、この意味において人間の自己生成は、とどまると

ころを知らないと言うことができる。人間が自然と、より豊かで深い関係に入りこんでいくにつれ、「ますます人間は、自分がまた自然と一体であることを感じるだけではなしに、知覚するようにもなる¹⁵⁾」のである。

(三)

人間は、生きた「活動的な存在」として「生の諸力」をそなえているのであるが、この力は「己れの対象にむかって精力的に志向する本質的な力¹⁶⁾」に他ならない。人間とは本来的に、自分の外にある対象とかかわり、それと取りくみ、自らの生命欲求をその中へと移し入れることによって始めて、その生命を発現し、その能力を発達させうる存在であり、その意味から対象的な存在と規定しうる。人間はつねに己れの生命の発現にふさわしい対象を必要とし、志向する。

人間が、その本質において対象的な存在である以上、その生命活動としての労働も当然、対象的活動としての性格をもつと考えられる。すなわち、労働の過程、自然を変革する過程においては、欲求主体としての人間の諸欲求が外化され、自然的諸対象の内へと移し入れられ、対象化される。だから労働とは、自らの生命欲求としての主体的本質を対象化する活動であり、労働生産物とは、対象化された対象性へと産出された人間の本質として規定しうる。つまり、何ができたかということは、主体に何ができるのか、および主体が何を欲求しているのかということの確証であり、主体の本質が何であるのかということの、実践的な自己確証に他ならない。だから、対象化の活動は必然的に、対象的な自己認識を伴う。人間は、己れを対象化することによって、己れを「対象として知り」あるいは対象を「己れ自身として知る」のである¹⁷⁾。このように、自己対象化としての労働は対象化された自己自身を、己れの内へ取りもどしていく過程において始めて、自らの「対象的な本質を現実的にわがものとする獲得¹⁸⁾」を伴うことに

よって、主体の自己確証となり、自己生成の活動となると考えられる。もし、それが伴わないなら労働は、もはや人間の自己生成ではなく、自己喪失として疎外された労働とならざるを得ない。つまり、客体への対象的産出と、主体への還元「わがものとしての獲得¹⁹⁾」(Aneignung)とは、不可分の統一を形づくっているのである。

たとえば、道具というものは、人間が歴史的に形成してきた自らの労働能力の対象的な本質であると考えられる。しかし、道具がそのことを実証されるためには、労働の過程において人間自身によって使用されなければならない。つまり、人間は道具の内に対象化されている労働操作を習得し、これを己れの主体的な労働能力として還元しなければ、労働することができないのである。

感性においても同様のことが言える。音楽的な感性を例にとってみると、個々には何の意味も感情もない音に、音楽家の生命が吹きこまれるや、美や愛や苦悩や悲嘆が、魂をゆるがす深い靈感となって響いてくる。しかし、それが可能なのは鑑賞する人間が、音響の内に対象化された音楽家の生命を、己れの感性として味わい主体化している場合だけである。事実、どんなに美しい音楽も、いまだ音楽的でない耳には決して美的対象としては意識されえない。ある個人にとってその感性の対象とは、彼の感性的能力の対象的な本質として、その能力を確証するのに他ならず、ただ彼の主体的な感性の及ぶ範囲内においてしか存在しえない。しかし、他方では、「人間の本質の対象的に展開された富」を媒介として始めて、「主体的人間的な感性の富」も生み出され発達させられるのである²⁰⁾。このように、客体への対象的産出と主体の内への還元とは、相互媒介的に発展する関係にあると考えられる。

また、一定の欲求の対象的な本質としての道具が、その欲求を充足する手段である以上は、道具の使用の過程とは欲求を、わがものとして享

受する過程、主体的な欲求充足の過程に他ならない。しかも「その欲求が特定の自然物に拘束され²¹⁾」なんら発展の可能性をもたぬ動物に比べ、己れの欲求を充足する手段そのものを間接的に、発展的に生産することのできる人間にあっては、それぞれの欲求はもはや特定の対象のもとへの帰属から解き放たれ、無限に多様な自己展開の可能性を獲得していると言える。よりいっそう高次の欲求充足の手段を無限につくりだしうる人間の労働はたえず、それに応じて新たなよりいっそう高次の欲求を、どこまでも生成・発展させていきるのである。

以上に述べてきた、対象的活動としての労働の過程においても、人間の自己生成には決して既存の限界などありえないと言うことができる。人間は自然や社会、己れをとりまく対象的世界に対し、能動的にかかわり、これを変革していく過程で欲求としての、能力としての己れの本質を、対象的に展開していく。そして同時にまた、この過程において対象的に展開されてきた己れの本質をあらためて「わがものとして獲得」し、己れの内的本質として確証していくのである。このように人間は、主体的に対象的世界の変革にかかわることによって始めて、己れの人格的特性を獲得していくのである。個々人はこの過程において、ますます視野を広げ、能力を高め、知性をとぎすまし、意志をきたえ、より高いモラルを身につけ、いっそう高次の他者との連帯、社会的連帯を実現していく。そして、その自然的姿態に己れにふさわしい風貌、まさしく「自分自身の顔²²⁾」(своё лицо)を刻みこみ、自己を認識し確証していくのである。個性がきらめき出すにつれ、自らの尊厳の感覚はますます揺ぎなきものになっていく。かくして労働は人々を団結させ、道徳的な美しさを鼓舞し、「人間を高潔にする²³⁾。」

人間の歴史とは、労働による人間の自己生成史に他ならず、世界史全体がその自己生成のあらがえない現実的な確証なのである。マルクスは、人間の自己生成の活動としての労働が

「自己目的」とすべき、人間の「主体的な富の豊かさ」について、次のように述べている²⁴⁾。「豊かな富」とは、1) 普遍的な交換によってつくりだされる個人の欲求、享楽、生産力等の普遍性であり、2) 外的にも内的にも、自然の諸力に対する人間の支配の完全な発展であり、3) あらゆる人間の諸力そのものの発展を自己目的とするところの、先行の歴史的発展以外のどんな前提もたぬ、人間の創造的素質の絶対的表出であり、4) 人間がそこでは、ある規定性のうちで再生産されるのではなく、彼の総体性を自ら生産するということであり、5) 人間が、なにか既成のものにとどまろうとするのではなく、絶対的な生成の運動のうちにあるということなのであり、すなわち、人間の内奥の完全なる創出なのである——。

(四)

しかし、周知のごとく人間は、その自己生成史において、深刻な自己疎外を体験せざるをえなかった。人間は、豊かな人間としてのその「主体的な富の豊かさ」を獲得するためには、どうしても疎外の段階を通らざるをえなかったのである。疎外の段階はいまだ人類の前史にすぎないが、それはやはり、その後の発展の力を蓄積する陣痛の時期として、人類の発展が、不可避免的に通らなければならぬ必然的な段階なのである。人間はその生成史において、自己自身を獲得するためにも、まず自己自身を外化・対象化したのであるが、この対象としての自己自身が今や己れに疎遠なものとなり、その内に己れを喪失し、つまりは自己自身から疎外されなければならないようになったのである。この否定的な自己関係は、たとえば宗教において、人間の空想や願望などの精神的な自己活動が、人間自身から外化し、彼にとって疎遠な神的あるいは悪魔的な活動として自立してしまい、それが逆に彼の自由な活動を抑圧し、支配してしまったことの内にみることができる。だから人間が疎外から自己を解放するための闘いは、まず神学に

対する闘いとして始められた。しかし神学はいまだ「人間の自己疎外の神聖な姿」であり、その仮象でしかない以上、「天上の批判は地上の批判へと」かえられねばならなかった²⁵⁾。人間の自己疎外の根源は、言うまでもなく人間の自己生成の過程そのものの内に、人間の自己生成の活動である労働そのものの内に見出されなければならない。

交換経済がめばえ、商品生産が発展するにつれ人間は、自分自身もまた一つの商品となりうるという恐るべき真理に遭遇した。今や、近代の『自由な』労働者たちは、自分を労働力商品として、最もみじめな商品として切売りしなければ生きていけなくなっているのである。人間の労働は、たいてい餓死しないための強制的な苦役となっており、人間拘束の冷やかなカテゴリーへとおとしめられている。人々は、労働の中では何ら自分のもとに在るように感じられず、自分の外に在るように感じ、労働の外でようやく自分を取りもどしたかのように思う。そこで、労働は非人間的な呪いとしてしか感じられず、あたかも非労働こそが人間的であるかのような錯覚が生まれてくる。まさしく「疎外されている人間の意識における労働と非労働との幻想的転倒²⁶⁾」である。人間はただ、その動物的な諸機能において飲食、生殖、住居、身の飾り、睡眠、あるいは怠惰などにおいてだけ、自分を取りもどしたように思い、逆に労働においては、自分を動物のようにしか感じられなくなってしまう。本来、人間の肯定的表現であるべき労働が、その否定的表現へと逆転し、肉体を衰弱・奇形化させ、精神を鈍らせ荒廃させ、生命を枯渇させてしまうわけである。

もし労働者にとって、自らの労働が外的であり強制的であるなら、彼を支配している疎遠な何ものかが存在しなければならないわけであるが、もちろんそれは神々でもなければ得体の知れぬ魔力でもなく、まさしく人間自身でしかありえない。つまり、人間がその労働において強制され、己れ自身と対立し自己を喪失している

のなら、彼にはその労働を搾取している他の人間が対立しているのである。本来、人間的本質の自由な自己表現であり、人間的欲求の自己充足であり、自由意志的な自己活動であるはずの労働が、労働者自身にとって疎遠なものとなってしまうのは、彼の労働が他の人間に帰属させられ、他の人間の欲求充足の手段へと、おとしめられているからに他ならない。労働者自身に帰属するはずのものが、他の人間の所有に帰せしめられる結果、所有者と非所有者への人間の社会的な分裂、支配―隷属関係および相互の自己分裂が生じてきたのである。

疎外のもとで働く人々の意識にのぼる労働といえは、宗教的な原罪観にもとづく「呪われた大地のうえで」の「あがないための」苦役であったり²⁷⁾、自由な安息に対する呪いであったり、他の目的物を入手するために支払う苦しい代償でしかなかった。他方、支配者として自ら働かざる者たちの意識の内では、労働とは、人間存在にとって不必要な非人間的で動物的で、けがらわしいやしいものであった。まったく働く必要を感じない彼らにとっては、己れの存在の意味は、もっぱら享楽や消費などの内に見出された。したがって、彼らの教育思想、支配のための支配者の思想は、きまって労働概念を欠落させてこざるをえなかった。たとえ何らかの形で問題にされたとしても、もっぱら抽象的な精神労働へ、一面的に解消させられたり従属させられたりした、いびつなものでしかなかったのである。額に汗し、からだにむち打って働く者たちは、支配者として自ら働かざる者たちによって、たえずいやしめられ、さげすまれてきた。もちろん、疎外された労働のもとでは支配される者も支配する者も、等しく自己疎外を体験せざるをえない。だが、支配者たちは実は、この疎外を肯定することの内に自己を喪失しているのであり、つまるところ、この疎外の中に自らの安泰の保証を見出しているのである。もちろん労働者たちはちがう。彼らは、現実の疎外そのものの内に自己の喪失を感じ、疎

外の止揚の内においてのみ自己の解放を見と出すことができるのである。だから、自ら働く人々の立場にたち、彼らの悲惨をうれえ、その解放を願った進歩的な思想家たちは、労働に本来的に内在する人間形成的な機能の回復を、疎外からの解放という実践的な要求とわがちがたく結びつけ、これを労働と教育の結合思想として提起してきたのであった。

人間は、その生命活動としての労働を、人間的な欲求の自由な発現として、自己充足としておこないうる度合に応じて、自らの主体的な自由を確立しようと考えられる。労働の発展とともに、自然と人間との間接性もそれだけいっそう大きくなり、この間接性の産出は内的にも外的にも、自然的な制約からの人間の自己解放として、人間の主体的自由の客観的な基礎と考えることができた。外的世界の豊かさは、内的世界の豊かさとなり、外的自由の獲得は内的自由の獲得でもあったはずだった。ところが、現実の疎外のもとでは人間が、外的には豊かであるにもかかわらず内的には貧しい、むしろ外的には豊かになったために、かえって内的には貧しくなってしまうという倒錯が生まれたのである。この関係は、人間が神の内に失うものが多くなり、神がより豊かで強力で偉大になっていくほど、人間は無力になり、いっそう貧しくなってしまったことの内にみることができる。労働疎外のもとでは、労働者が生産物の内へ喪失するものが多ければ多いほど、彼はそれだけ貧しくなる。生産物は彼の手を離れるや、価値増殖手段へと転化され、彼に敵対してくる。だから、彼がみっちり働けば働くほど、彼が自分のまわりにつくりだす疎遠な世界は、それだけ強大となる。まさに、外の豊かさが内の貧しさと「直接的に比例して進行する²⁸⁾」のである。ここに疎外ということの真の恐ろしさ、そのたえがたいまでの深刻さがある。

労働する人間が、深刻な自己疎外から自己を解放していくための第一歩は、労働の本来的な目的、自己目的としての人間の本質的諸力の総

体的な発現・発展を、何ものにもかえがたい第一の生命欲求として問いかえし、闘いっていくことである。この意味から「豊かな人間」とは、自分だけは空虚化をまぬがれているといった幻想に安らっているような人間とはまったく異なり、その空虚さに一瞬たりと屈従できぬほどに欲求の豊かな感性的で情熱的な人間であり、まさしくその欲求の豊かさにおいて、疎外の根源にたちむかう人間でなければならない。

(五)

労働と教育の結合を通して人格形成、その全面发展を志向するという結合思想は、四世紀をこえるその展開史をもっている。トーマス・モアに始まり、カンパネラ、コメニウス、ウィンスタンリ、ジョン・ペラーズ、ペスタロッチ、オーエン等へとひきつがれてきた、脈々とした思想史を形づくってきた。すぐれた思想家であると同時に、精力的な社会的実践者でもあった彼らは、それぞれ自分なりに、労働の有する教育的な意義や機能、社会的役割などを鋭く洞察した。しかし彼らの高貴な理念を実現するための条件は、まだ成熟していなかったために、その解決策は、もっぱら彼ら自身の頭の中から案出されることになった。自らに課せられた歴史の重い桎梏をこえ出るために、彼らはいまだ空想の翼を必要としたのであった。彼らは、できるだけ詳細な計画を案出し、できれば模範の実験によって例証することで、何とか人々を納得させようと試みた。しかし結局のところ、彼らは、自らの思想を実現するための物質的な基礎、社会的政治勢力に何ら依拠しえなかったために、彼らの信念に満ちた叫びも、「荒野によばわるものの声²⁹⁾」でしかなかったのである。

マルクス主義思想をそれまで先駆的に展開されてきた結合思想から区別するものは、労働と教育の結合の根拠を単に主観的な願望や超歴史的な理念としてではなく、現実の資本主義的な生産様式を分析し、その客観的な運動法則を把握することによって、物質的な基礎をもった歴

史法則として提起しえたことに他ならない。マルクス主義は「労働の発展史のうちに、社会の歴史全体を理解する鍵をみとめる³⁰⁾」。つまり、労働の発展それ自体が人間の自己疎外を必然的なものとするが、また、それを通してのみ、さらに高い段階での人間の解放を準備すると考えるのである。

労働の技術化と組織化とが一定の段階に至ると、それまでは未分化であった精神的労働と肉体的労働とが分裂し、別々の個人にふりあてられるようになり、ここに真の意味での分業が発生する。また、生産力の発展が、個人生活の維持をこえた生産を可能にするにつれ剰余生産物が生まれ、商品生産、交換経済が発展し、貨幣が現れ、私有観念がめばえる。生産手段の発展と蓄積がすすむと、その私的所有のもとで貧富の差が深まり、労働と享受とが、生産と消費とが切りはなされ、別々の個人へと分割され、生産は、もっぱら私有財産をふやす手段とされ、労働は自由意志的ではなく他人による強制となる。こうして、非労働者が労働者を支配する体制がつくり出され、人間による人間の搾取、階級社会が出現する。階級間の敵対は、非和解的なものとなって人間からの人間の疎外、つまりは相互の自己疎外を必然とする。人間の自己疎外は男性と女性との対立、都市と農村との対立、民族的抑圧としても現れ、ついには帝国主義戦争、無差別の大量殺戮となってその極に達する。

しかし他面では、この過程において協業、工場制手工業、大工業へと労働様式が未曾有の速さで発展し、生産力が社会的に統合され、分業と商品生産の多様性を反映して多様な個性が開花し、交通・伝達手段の発展から人間相互の結合が深まり、人類が社会全体として、世界史的に解放されるための物質的な前提が形づくられていく。

中世までの分散的で狭小な生産手段は、近代的で巨大な社会的生産力へと転化され、生産手段の私的所有にもとづく資本主義的な取得形態

の矛盾が明るみに引き出される。大工業は「それ自体客観的な生産有機体として労働者を組織」し、「かれらに集団的労働の規律と組織の原則をおしえ³¹⁾」彼らを組織された階級、近代的プロレタリアートへと形成する。また「大工業の技術的基礎は革命的である³²⁾。」生産過程への機械の導入は、非力な婦人と児童へも生産的労働、その技術と組織とを解放し（もちろん疎外態としてではあったが）自然力をもって人力に、自然科学の意識的応用をもって職人的な熟練に代える。生産過程への絶えまない自然科学の導入は、ついに技術学という特殊な近代科学を生みだす。技術学は、自然に対する人間の能動的な力を労働者自身の精神的な力へと高め、科学的な世界認識を基礎づけていく。大工業は、最先端の科学・技術に浸透され「宇宙を人間のまえに開いてくれる労働」「今日の現実にはいたるまでの人類の歴史を開いてくれる労働³³⁾」を、万人に対して平等に保証するのである。このように「科学が工場の中で技術と結びつき」「それじたい世界を説明する論理の体系として構築されはじめる段階にいたって」はじめて、系統的な大衆教育、近代公教育としての「人間の生き方につながる、したがって人間の権利としての科学教育が成立」してくるのである³⁴⁾。科学・技術の教育は、大工業段階における生産労働を、その根底にある自然科学の一般原則に還元し、ひろく社会的生産の基礎能力をあたえ、総合技術教育、ポリテフニズムとして確立されてくる。だがまた、技術の内容は、技術史として、社会発展史・労働運動史・「革命史」と深く結びつけて学習される必要がある³⁵⁾。そうであって始めて「ポリテフニズムは、技術の発展がどこへむかっていくのか、それがどのような道をたどるのか、現代生産のなかの何が破壊へと運命づけられているのか、そして何がますますひろく発展していきうるのかを示す³⁶⁾」のである。

さらに大工業は、労働者を永続的に同じ機能にしばりつけ、多面的な能力の発達を局限して

きた旧来の分業の基礎を破壊する。大工業は、労働過程の分業や協業の体系をたえず変革し、労働者がある生産部門から他の生産部門へ不断に移動させるため、労働の転換機能の流動性、労働者の全面的可動性を必然とし、その最高度の多面的発達を一般的な社会的生産法則とする。すべての人間を、肉体的諸能力と精神的諸能力との統一を体現した科学・技術労働者へと、「全面的に発達しゆく個人³⁷⁾」へと形成することをその本性として要求し、また物質的に基礎づけるのである。

大工業は全体として、途方もない規模へと生産を飛躍させ、その結果、すべての人間が例外なしに直接の物質的生産への束縛から解放され、自由な時間をますます平等に保証されるにいたる。個人的にも社会的にも精神的諸活動の比重は、はるかに高まり『高尚な』社会的諸機能は、もはや特定の人間の独占物ではなくなり、階級社会を止揚する物質的条件が成熟していく。言うまでもなく、この過程は自然成長的ではない。大工業の本性はたえずその資本主義的形態と矛盾する。大工業の発展はいずれ、その桎梏でしかない資本主義的形態を打ち破らざるをえない。それはただ深刻な政治革命と、全般的な社会的、経済的変革を通してのみ可能である。

労働疎外を根絶し、人間と労働との関係を本来のものに回復するためには労働そのもの、および労働をめぐる社会的諸関係を、根本的に変革しなければならない。それをなしうる唯一の歴史主体は、労働者階級に他ならない以上、労働と教育のはらむ矛盾は、彼らが権力主体となり、教育主体となって、自らの生成過程を自分自身の手に取りもどしていくことを前提にしてのみ、止揚されうる。つまり、労働と教育の結合思想は、現実には労働者階級の自己解放の闘いの主要な一環としての、自己教育の思想であり、資本主義的な労働疎外を止揚する思想として、革命的な思想として構想されなければならないのである。(博士課程大学院生)

注

- 1) K. Marx/F. Engels, Die deutsche Ideologie. Marx/Engels, Werke, Dietz Verlag, Berlin 1959, (以下 W. と略す) Bd. 3, S. 21. (岩波文庫版 古在訳 P.24)
- 2) 大橋精夫「現代の教養と科学的認識」(『現代民主主義教育』第3巻 青木書店 1969) P.45
- 3) ・4) K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte. Marx/Engels, Werke, Ergänzungsband, Schriften bis 1844, Tl. 1, Dietz Verlag, Berlin 1968, (以下 W. E. と略す) S. 578. (国民文庫版. 藤野訳 P.222)
- 5) K. マルクス『資本論』第1巻 第1分冊(全集刊行委訳) 大月書店 1968 P.234
- 6) 芝田進午『人間性と人格の理論』青木書店 1961 P.68
- 7) 8) 島田 豊「科学的世界観と人格の形成」(『現代民主主義教育』第3巻) P.17
- 9) F. Engels, Dialektik der Natur. W. Bd. 20, S. 452.
- 10) И. И. Чангли, Труд. Москва 1973, стр. 49.
- 11) 芝田進午 前掲書 P.65
- 12) 梅本克己『唯物史観と現代』岩波書店 1968 P.118 ~P.126 参照
大橋精夫「マルクス主義の発達観と教育(上)」(『科学思想』No. 7, 1973. 新日本出版社) P.96~P.100 参照
- 13) W. E., S. 516. (藤野訳 P.105)
- 14) ibid., S. 517. (藤野訳 P.107)
- 15) F. Engels, Dialektik der Natur. W. Bd. 20, S. 453.
- 16) W. E., S. 579. (藤野訳 P.224)
- 17) ibid., S. 579. (藤野訳 P.225)
- 18) ibid., S. 583. (藤野訳 P.232)
- 19) ibid., S. 512. (藤野訳 P.98)
- 20) ibid., S. 541. (藤野訳 P.154)
- 21) 大橋精夫「マルクス主義の発達観と教育(上)」 P.102
- 22) С. Л. Рубинштейн, Принципы и пути развития психологии. Москва 1959, стр. 122.
- 23) V. A. スホムリンスキー『教育の力を信じて』(笹尾訳) 新読書社 1974 P.366
- 24) K. マルクス『経済学批判要綱』第3分冊(高木訳) 大月書店 1961 P.421
- 25) K. Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. W. Bd. 1, S. 379.
- 26) 島田 豊「現代人の疎外と自由」(『現代思想』No. 6, 1971 青木書店) P.46
- 27) 矢川徳光「労働と教育」(『教育学著作集』第6巻 青木書店 1974) P.247
- 28) W. E., S. 511. (藤野訳 P.98)
- 29) Н. К. Крупская, Народное образование и демократия. Педагогические сочинения, Москва 1957, (以下 П. と略す) т. 4, стр. 250.

- 30) F. Engels, Ludwig Feuerbach und der klassischen deutschen Philosophie. W. Bd. 21, S. 307.
- 31) 芝田進午 前掲書 P.206
- 32) F. Engels, Anti-Dühring. W. Bd. 20, S.274.
- 33) A. B. ルナチャルスキー 『労働教育論』(矢川訳) 明治図書 1970 P.122
- 34) 川合 章 『民主的人格の形成』 青木書店 1972 P.67
- 35) В. И. Ленин, О политехническом образовании. Полн. собр. соч., Москва 1970, т. 42, стр. 229.
- 36) Н. К. Крупская, К. вопросу о политехнизации рабочих. П. т. 4, стр. 529.
- 37) 矢川徳光「全面発達の教育理念」(『教育学著作集』第6巻) P.194